

校訓「敬天愛人」とその精神

藤本 誠

一 「敬天愛人」を校訓に定める

開校三年目の一九一四（大正三）年四月、遠山参良院長によって「敬天愛人」が校訓に定められた。

すでに開校以来提唱され定着していた、「己れ自ら監督し、役に立つ善人たれ」の教育指針を象徴的に表わし、根幹となる語（四字成句）として定められたのである。

遠山院長が召天されるまで教鞭を執った第五高等学校は、「剛毅木訥」を motto としていたが、「敬天愛人」はキリスト教主義学校・九州学院の建学の精神として当を得たものであった。

後の一九三二（昭和六）

年七月の座談会「その昔を語る」（『創立二十周年記念誌』昭和六年一〇月一日発行）で、遠山院長自身が「敬天愛人」を校訓とした経緯について次のように語っている。

「あれは、藤井先生が来てから、鹿児島へ修学旅行に行つて、柳原牧師から今院長室にあるあの石摺を貰つて来た。それからいつとはなく學院の motto としようと思ふことになつた」（七二〜七三頁）

西郷隆盛愛誦の語「敬天愛人」が九州学院の校訓（『建学の精神』）となつた経緯は、大正二年に行なわれた最初の県外修学旅行で、引率者の教頭・藤井寅一（聖公会信徒）が、西郷が揮毫した書の石摺りを持ち帰つたのがきっかけである。遠山院長が修学旅行団の往訪を事前に連絡していたのであろう、メソジスト鹿児島教会（鹿児島市山下町三二）の柳原直人牧師から藤井教頭が



遠山参良初代院長

貰って来たのである。そして協議のうえ、大正三年四月、校訓として定め、発表したのであった。

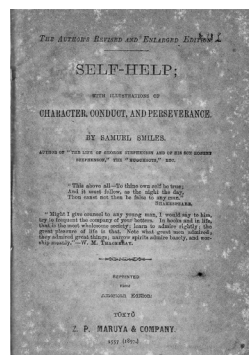
だが、そのことよって、『西郷南洲遺訓』⁽¹⁾に表明された西郷の敬天思想、及び陽明学的人倫思想を九州学院の人格教育の標語として採り込んだというのでは決してない。「敬天愛人」が、九州学院のキリスト教に基づく人格教育の理念を象徴的に表わす標語として、援用するにふさわしいものであったのである。

二 「敬天愛人」の成立とその精神

そもそも、「敬天愛人」は西郷隆盛が最初に用いた四字成句ではなかった。

諸橋轍次博士の『大漢和辞典』の「敬天愛人」という項には、「天をやまひ、人を愛する。西郷南洲の語」と解説があり、「道は天地自然のものなれば、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始す可し」という『西郷南洲遺訓』の中の一文を引証している。しかし、この「西郷南洲の語」（西郷の造語）⁽²⁾というのは間違いで、西郷が愛誦し揮毫した語（四字成語）と解すべきである。⁽³⁾

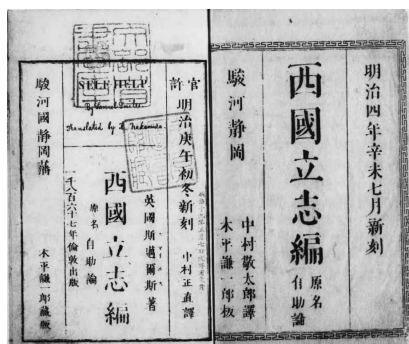
『遠山参良先生蔵書遺本』（九州学院所蔵）の中に、サミュエル・スマイルズ(SAMUEL SMILES)の著書『SELF-HELP』⁽⁴⁾（『西国立志編』・『自助論』）と『CHA



『SELF-HELP』表紙

RACTER』⁽⁵⁾（『西洋品行論』・『品行論』）の洋書がある。遠山参良院長が愛読し、第五高等学校や九州学院、あるいは鎮西学館などで教材に使ったのかもしれない。実際、泰西自由主義が標榜され民権道徳が教授されていた徳富蘇峰の「大江義塾」では、明治一九年の学科課程によると、修身の五級に『西国立志編』が、五・三級に『西洋品行論』が採用されていたのである。⁽⁶⁾

『SELF-HELP』⁽⁷⁾（一八五九年発行）は、中村正直⁽⁸⁾（号・敬字）によって一八七一（明治四）年七月に『西国立志編 原名自助論』として訳出版され、福沢諭吉の『学問のすゝめ』（明治五年二月・九年一月出版）と共に明治の二大啓蒙書となった。「明治の聖書」といわれ、当時の日本で総計一〇〇万部は出たといわれるほどのベストセラーとなった。このイギリスのブルジョア的勤勉立志を説いた『西国立志編』は、近代国家と資本主義の形成期にあって、封建的な儒教に代わりうる西洋のキリスト教的道徳を教示してくれる書として、多くの青少年に光明を与えたのである。「天はみずから助く



『西国立志編』（国立国会図書館：近代デジタルライブラリー）

書とも人倫を超越した「天」（西洋キリスト教世界の「神」の視点を踏まえて書き始められている。
 中村正直は一八六八（明治元）年六月、イギリス留学から帰朝し、一〇月に静岡学問所が開設されると、一等教授に任命され、「敬天愛人説」（上・明治戊辰、及び下）を物する。「これは『天』の思想を扱ったもので、キリスト教的なゴッドを儒教思想の天の思想から解釈しようとしたもので、当時のキリスト教思想の受容過程として、また明治以降の敬天思想の出発点をみるうえに重要資料となる」文書である。この著述で、中村正直が日本人として初めて「敬天愛人」を使ったのである。そして、この「敬天愛人」が西郷隆盛に伝えられた。

るものを助く」
 『Heaven helps those who help themselves』で始まる『西国立志編』、および「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言へり」で始まる『学問のすゝめ』、両



中村正直（国立国会図書館：近代「日本人の肖像」）

平川祐弘氏（東京大学名誉教授）によると、「静岡で中村から訓えを受けた薩摩藩士・最上五郎から『敬天愛人説』を伝え聞いた西郷は、天の思想に共鳴した。しかし最初に提唱した中村は、西郷が合点したのとはやや別様の理解をしていた」のである。中村正直にとって『西国立志編』の「天（Heaven）」は、人格的存在としての「神」（God）をも意味していた。⁽⁹⁾ 訳出した『西国立志編』（明治四年七月発行）に中村正直が「緒論」（漢文）を書いているが、その中にも「敬天愛人」が要の語として記されている。次の二カ所である。「敬天愛人」の傍〇は、筆者（藤本）が施し付記した。

「……民委^{メンパイ}官者^{カンシャ}、必學明行修之人也、有敬天愛人之心者也、有克己慎獨之工夫者也、……」（書き下し文……民委^{メンパイ}・官^{カン}たる者、必ず学明らかに修行まれるの人なり。天を敬し人を愛するの心ある者なり。己に克ち独りを慎むの工夫ある者なり）⁽¹⁰⁾

「余又近讀西國古今僑傑之傳記、觀其皆有自主自立之志、有艱難辛苦之行、原於敬天愛人之誠意、

以能立濟世利民之大業、…」（書き下し文…余また近ごろ西国古今の偉傑の伝記を読み、そのみな自主立の志あり、艱難辛苦の行いあり、天を敬し人を愛するの誠意に原づき、もつてよく世を濟い民を利するの大業を立つるを觀て、…）」

明治四年、この『西国立志編』が刊行されるや、たちまち全国に流布し、「明治の聖書」といわれる啓蒙書となった。明治六年、征韓論に敗れ鹿児島に下野していた西郷隆盛も、当然この『西国立志編』の「敬天愛人」に改めて瞠目したであろうことはいうまでもない。すでに薩摩藩士・最上五郎から中村の「敬天愛人説」について聴き、その天の思想に共鳴していたのである。そして、「敬天愛人」は西郷隆盛の愛誦語として揮毫され人口に膾炙した、そう考えるのが自然であろう。

その後、『西国立志編』は『西洋品行論』などと共に版を重ね、自助自立の精神を教授するテキストとして使われ、流布した。

ちなみに内村鑑三は、西郷隆盛を『代表的日本人』(Representative Men of Japan、一九〇八(明治四一)年四月二十九日発行、警星社書店)で第一に取り上げ、「敬天愛人(Revere Heaven: love people)」を奉じる勇敢で正直な将軍」と紹介し、西郷の文章には「キリスト教的な感情」がみられると記している。内村の理解し

た独自のキリスト教的人物像としてではあるが、西郷のキリスト教信徒に優るとも劣らない代表的日本人として紹介している。

三 「院是」としての「敬天愛人」

校訓・「敬天愛人」は、ブラウン記念礼拝堂が竣工する前年の一九二四(大正一三)年二月一日に、九州学院宗教部から発刊された新聞(第一号)の表題を飾ることになる。『敬天愛人』は、キリスト教主義学校・九州学院の基幹である宗教部が発刊した新聞であった。一面中央には、前年の大正一二年六月に遠山院長が Doctor of Letters (文学博士) の学位をペンシルバニア州・ミューレンバーグ大学から受領し、その伝達式当日の記念写真が掲載されている。

西郷隆盛揮毫の石摺り『敬天愛人』(九州学院所蔵)の題字下の巻頭に、次の「發刊に際して」が記載されている。



西郷隆盛揮毫「敬天愛人」

「わが九州學院が大江原頭に呱呱

の第一聲を擧てより、歲月は流れて茲に十四年、今や内に六百の健兒を擁し、外に五百餘名の卒業生を控えて、教學の基礎漸く定まつたのである。去る者は日々に疎き世の習しも然る事乍ら、花開く晨には遠き風塵の都より故郷の櫻思ひ出で、懐郷の情せゝろに學院を思ふ心もあるべく、月明の窓には乳離れし巢立して世の勤勞に赴きし教へずに幸あれと祈る者なきにしも非ず、去りし者と残りし者との間に友愛の血が紅なるを見るのである。此血潮の脈搏が遂に顯はれて我『敬天愛人』は創刊さるゝに至つた。

我々は心からの告白として九州學院を一つの家庭といはう而して教ふる者も教へらるゝ者も、將又教へられし者も皆等しく同胞であると考へ様。『敬天愛人』は此基礎の上に創刊される故に、ひとへに友情親愛の機關である。我々は此『敬天愛人』に、瑰麗の文章、莊大の論議を期待しやうとは欲しない。眞情溢るゝ手紙を期待する。宣傳し主張する眞理の使徒よりも寧ろ共に語つて涙と笑を分つフレンドであれと希念する。

思へば國民受難の年は暮れて復活新興の曙は開かれた。若き我等の立てる所は明治維新以来嘗てなかりし程に、立ち甲斐あるの地點である。一物を持てる者は必ず為す所あるべき、又為す所あり得る地點である。然し新興は少數者の仕事ではない、國民全体の任務で

ある。我々一人々々の責任である。猫も杓子も與るの覺悟あるべきであるが、いざ本當の任に當るといふ場合にになると斷々乎として之ばかりは廢物でされてはならない事が分るのである。即ち敬天愛人の一義に其人格を基礎として涵養して居る士のみ正に之をなす資格を有つ。獨り新興事業に於てのみならず、邦家は斯の如き人材を要する事今後は一層切なるべきを思はざるを得ない。我學院の院是の徹底の必要轉た急切なるを感じて、茲に宗教部は最大限の奉仕を致さん事を決心する。但し友遠方より來るさへも樂しい、況や友一齊に起つて戰ふに於ては其愉快又とない。世にある諸君よ、院内に居る諸君よ、我々は『敬天愛人』なる我學院の標語を旗印として高い大きい志を振起して國家のため、全人類のために戦ひ吾人の尊き使命を果たしたいものだ

ここでは「敬天愛人」が、九州學院という家庭の要の語として位置づけられ、「敬天愛人」の一義に人格を基礎として涵養している優れた人材を世に輩出するための「院是」として捉えられている。今や九州學院の校訓「敬天愛人」は、建学の精神に則つて高大な志を振起する旗印として掲げられているのである。

遠山院長は、「敬天愛人の發刊を祝して」という次の一文を寄せている。

「普通教育の主要なる目的は、人格を陶冶し、品性を向上せしむるにあることは申すまでもない。我學院の期する所も亦之に外ならぬのである。

元來學院教育は動もすれば其形式劃一に流れ、其結果單調に失するの弊を免れぬ。在來の學校組織に於ては、蓋し止むを得ぬのである。

是れ識者の夙に認むる所にして、個性没却、平凡教育等の非難を聞くと共に、個性尊重を力説するもの日に多きを見るは喜ぶべきことである。

教育者が之に對して研究施設を怠らぬのは固より當然と謂ふべきことであるが、被教育者に於ても、亦自ら進んで此短を補ひ、以て教育の効果を全うするの覺悟がなければならぬ。即受動の態度を變じて主動となし、自覺自發、以て大に自我的要素を學校教育に注入し、個性の没却を防ぐと共に、其特質を發揮するに努めねばならぬ。

我學院に於て宗教部は、茲に敬天愛人を發刊して、特に教育の目的たる人格陶冶に資せんとせらるるは、大に我意を強うする所である」

遠山院長は校訓「敬天愛人」を標語に、教育の目的が人格を陶冶し品性を向上させることにあることを改めて強調している。

こうして「敬天愛人」は九州學院の「院是」として

定着し、一〇〇年を超える學院史の根幹を支える校訓となつたのである。

(ふじもと まこと／九州學院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長)

(注)

(1) 山田濟齋編『西郷南洲遺訓』(一九三九年二月二日発行、岩波文庫)の「書後の辞」に次の解題が施されている。

「一 遺訓の由来は、明治三年莊内侯の公子酒井忠篤・忠實を初め、藩士菅貫秀・三矢藤太郎・石川靜正等數十人來つて薩に寓し、屢々翁に就いて教を乞ふ。已に帰り、其間く所を纂めて一書となし、之を同志に頒ちしに起る。明治二十三年三矢藤太郎之を莊内に印行し、『南洲翁遺訓』と題す、是れ遺訓印行の始か。二十九年佐賀の人片淵琢再び之を東京にて板行し、『西郷南洲遺訓』と題す。爾來有志者往々之を傳寫し刷印して珍惜愛誦せり」

(2) この一文は(1)の岩波文庫版によると、次の「二二」である。「敬天愛人」の思想を端的に表している。

「二二 道は天地自然の道なるゆゑ、講學の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。己れに克つの極功は「母_レ意母_レ必母_レ固母_レ我」○論語と云へり。

總じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝぞ。能く古今の人物を見よ。事業を創起する人其事大抵十に七八迄は能く成し得れ共、残り二つを終る迄成し得る人の希れなるは、始は能く己れを慎み事をも敬する故、功も立ち名も顯るるなり。功立ち名顯るゝに随ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒愼の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其成し得たる事業を負み、苟も我が事を仕遂んとてまづき仕事に陥り、終に敗るゝものにて、皆な自ら招く也。故に己れに克ちて、賭す聞かざる所に戒愼するもの也」

その他に「敬天愛人」の思想を端的に窺うことができるのが、次の三文である。

「二四 道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛する也。

二五 人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを盡て人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

二六 己を愛するは善からぬことの第一也。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕護の生ずるも、皆な自ら愛するが為なれば、決して己れを愛せぬもの也」

とりわけ「二四」は「マタイによる福音書」二二章に見られる

キリスト教の隣人愛に通じるものがある。

(3) 古川哲史『明治の精神』(昭和五十六年三月二〇日発行、ペリカン社)の「敬天愛人」によると、「南洲は『敬天愛人』という四字を揮毫するさいには、きまつて『南洲書』と署名し、けつして『南洲』とだけすましていない。この『南洲書』という署名の場合、南洲自身の発明した語ではないのが通例のようである」(二三頁)という。西郷が「敬天愛人」を揮毫するようになったのは、中村正直の『西国立志編』が出版された後の明治七年以降のことである。

(4) 渡部昇一『中村正直とサミュエル・スマイルズ』(サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』一九八一年一月一〇日発行、講談社学術文庫)によると、

「本書の原著である Self-Help with Illustrations of Character and Conduct の原稿は、最初 Routledge 社に持ち込んだが断られ、『ステイブソン伝』を出してくれた John Murray 社から出ることになった(一八五八年七月)。ひとたび出るや空前の売れ行きで、一年目に二万部、一八六四年までに五万五千部、一八八九年までに十五万部、その後さらに十二万部という数字が残っているが、当時の出版界としては稀有のことだった。それは世界各国語に訳され、彼の著作者としての名声は確立し、一八七八年には母校エジンバラ大学の名誉法学博士(LL.D.)を与えられたほか、イタリヤなどからも勲章を受けている。一九〇四年四月十六日、ロンドンのケンジントンの自宅でなくなった。享年九十二歳(五四八頁)

スマイルズの四福音書といわれる著書は次の通りである。

* 『Self-Help,』 (一八五九) 『西国立志編』(中村正直訳、明治四年七月発行)・『自助論』。

* 『Character,』 (一八七二) 『西洋品行論』(中村正直訳、明治一〜二三年発行)・『品行論』。

* 『Traft,』 (一八七五) 『西洋節用論』(中村正直訳、明治一九年発行)。

* 『Duty,』 (一八八〇) 『義務論』。

(5) 明治一八年の「私立大江義塾規則改正同書」(花立三郎・杉井六郎・和田守編)『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』一九七八年一〇月三二日発行、三二書房・三三八〜三四三頁)に見られる学科課程は以下の通り。

本科課程の修身は『孟子』(一年)、『論語』(二年)、『大学』、『中庸』(三年)の四書を中心に行っているが、スペンサーの『道徳之原理』(三年)もあり、泰西自由主義も取り込もうとしている。明治一九年の学科課程表では、修身の五級に『西国立志編』、五〜三級に『西洋品行論』が採用され、吉田松陰の『幽室文稿』が加わっており、大江義塾の泰西的道德の再強化が窺える。『西洋品行論』と『幽室文稿』は塾生の読書会にもテキストとして使われた。

(6) 大久保利謙『明六社』(二〇〇七年一〇月一〇日発行、講談社学術文庫)の「明六社社員銘々伝」によると、中村正直(一八三二〜一八九二)は、

「明治六(一八七三)年、東京小石川江戸川の畔に同人社

をおこして福沢諭吉の慶應義塾と並び称された。なお彼はキリスト教に心服し、『擬「泰西人」上書』を発表(明治五年『新聞雑誌』一五六号に掲げた)。これは匿名であったが中村のもので、またキリシタンが禁じられていた時に大胆にキリスト教を弁護して、天皇も受洗せよと書いた。『陛下もし果たして西教を立てんと欲せば、即ち宜しく先づ自ら洗礼を受け、自ら教会の主と為り而して徳兆唱和すへし』(原漢文)と書いた。当時として随分思いきった発言ではないか。それだけではない、中村みずから明治七年、カナダメソジスト派の宣教師・カックランから洗礼を受けたという(小沢三郎『中村敬宇と擬泰西人上書』―『大隈研究』第二参照)。これは中村が儒教の天の思想とキリスト教のゴッドを結びつけたからであった。後年文部省の嘱で書いた『教育勅語』の原案が不採用となったのもこのような天の思想を中心としたからであったが、これも西洋思想の一つの受け入れ方であろう。かくて明六社員中、中村と西村茂樹は主として精神文化の面を受けもったのである。文学博士、貴族院議員となった(二五二〜二五三頁)

(7) 『明治啓蒙思想集・明治文学全集3』(昭和四二年一月一〇日発行、筑摩書房)・大久保利謙「解題」四四八頁。

(8) 平川祐弘『天八自ら助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』(二〇〇六年一〇月一〇日発行、名古屋大学出版会)四七頁。

(9) 松沢弘陽は『近代日本の形成と西洋経験』(一九九三年一〇

月二五日発行、岩波書店）・「第四章 西洋経験と啓蒙思想の形成—『西国立志編』と『自由之理』の世界—」で次のように論じている。

「この（注・敬字）哲学の中心になるのはおそらく、キリスト教の神は、儒教の思想によって理解することはできないか、という問いであった。たとえば、他の同様のことばからかなり意識的に使われられている、『真一無形之神即道化之主宰』といった表現は、キリスト教の神のことだとはっきりは云われていないが、キリスト教の神観念を念頭において使われていることはまちがいないであろう。（この点は『天道遡源』の用語法に従ったのではないかと思われる）。敬字は、これに通じるものを詩経や書経の『皇天』『上帝』『天』といった観念に見出した。そこには『漢唐以下』から『三代以上』への復帰の志向が明らかであり、この天の観念にはなお、時として、朱子学的な理解の傾向がうかがわれたが、朱子学の『天即理』という観念を再検討することがはっきりと求められていた。さらに、詩経や書経における『天』『上帝』等は、天子が行なう政治的祭祀の対象だったが、敬字は、これが『福善禍淫』によって一人一人の人を導く倫理的支配者であることを強調した。その意味で『天』や『上帝』は倫理化された。また、支配者である天子だけではなく、全ての人がひとしく『天』にかかわるという意味で『天』は普遍化され、そのかわり方が祭祀から『敬』と倫理実践へと内面化された。

このようにとらえられた『天』や『上帝』は、唯一・無形・

偏在で、しかも人間と自然を『造り』『主宰』する人格的存在だった。それは、全知・全能であり、人間にその本来の『性』を遂げさせようとする『仁』に満ちていた。『天』による『造化』には、合理的な秩序—『理』・『律法』—が支配していた。それは、人倫の世界については道德的な『理』・『律法』として現れるのである（二五二—二五三頁）

(10) 『西国立志編』（講談社学術文庫）五三頁。

(11) 同前、五四頁。

(12) 内村鑑三『代表的日本人』（一九九五年七月一七日発行、岩波文庫）一六頁。西郷隆盛について内村鑑三は、さらに次のように記している。

「『敬天愛人』の言葉が西郷の人生観をよく要約しています。それはまさに知の最高極地であり、反対の無知は自己愛であります。西郷が『天』をどのようなものとして把握していたか、それを『力』とみたか『人格』とみたか、日ごろの実践は別として『天』をどういうふう崇拝したか、いずれも確認するすべはありません。しかし西郷が『天』は全能であり、不変であり、きわめて慈悲深い存在であり、『天』の法は、だれも守るべき堅固にしてきわめて恵みゆたかなものとして理解していたことは、その言動により十分知ることができます。」（四〇頁）

(13) 『代表的日本人』（岩波文庫）一八頁。